

中国人の地縁関係コミュニケーションについて

張 筱平

(訳＝戸谷将義)

はじめに

中国語を使って中国人とコミュニケーションを取るためには、言語学界限で言うところの聞く・話す・読む・書くの四大技能をマスターする以外に、中国のコミュニケーション文化を熟知する必要がある。これにより、誤ったコミュニケーションによる誤解を有効的に回避することができ、コミュニケーションの目的を最大限果たすことができるのである。

中国のコミュニケーション文化の範囲はきわめて広い。なかでも、人間関係の付き合いにおける規範と禁忌は重要な側面である。社会における人間関係といえは、よくある



分類に「三縁関係」がある。すなわち、「血縁関係」「業縁関係」と本稿で考察する「地縁関係」である。前二者の人間関係における付き合いの常道は、筆者が既に拙文「中国人の血縁関係コミュニケーションについて」と「中国人の業縁関係コミュニケーションについて」にて簡単に論じた。

「地縁」の概念について、簡単にいえば「地理的な縁」である。「地縁」はコミュニケーション文化の専門用語ではない。たとえば、政治学には「地縁政治」があり、経済学には「地縁経済」などがある。しかし「地縁関係」の概念は、コミュニケーション文化における人間関係、すなわち同一地域において出生あるいは居住することを縁として形成された人間関係のことを指すと一般的に認識されている。

地縁関係のコミュニケーションは一般的に二大分類に分けることができる。一つは同郷関係のコミュニケーション、もう一つは近隣関係のコミュニケーションである。この二つが関係するコミュニケーションは、いかなる国にも存在するうえ、ある似かよった特徴をそなえている。それは多かれ少なかれ、地縁感情のはたらきが存在しているということである。お互いに関係を維持し調整するなかで、法律に従う以外は、社会の公の徳、および地域性の民間組織とその規約に依拠する。中国の地縁関係のコミュニケーションもこれと同じである。しかし、中国文化が自己の特徴をもつと同じように、中国の地縁関係のコミュニケーションも自己の文化的個性をそなえている。本稿では、このような中国の地縁関係コミュニケーションにこめられた文化的個性とその表れを論じる。中国語のことばと文化を学び実践する日本人の方々が中国の地縁関係のコミュニケーションを理解し接触するうえでの一助となることを願っている。

一 中国の特色ある地縁意識

よく中国人と付き合いのある外国人は次のような場面に出くわしたことがあるだろう。お互いを知らない二人の中国人が会って話をする際に、一般的に相手に必ず一つの質

問をする。——「あなたはどこの人ですか」。このように聞くのは、主に相手の戸籍地か出生地を知りたいためである。このような質問を聞いても、中国人は一般的に気まずさや戸惑いを感じることはなく、回答を拒否することもない。すでに当たり前の習慣であることをみな知っているからである。もしお互いに相手の戸籍地か出生地、および仕事や生活の地域が自身と同じか近いことを知ることができれば、喜んでお互いを「同郷」と認識する。感情的な距離は自然と近づき、すぐにお互いを知ることができるようになる。さらにきわめて早い段階で何でも話せる親密な友人となることができるのである。なぜこのようなことが起こるのであろうか。これは、一般的に中国人がみな中国の特色ある地縁意識を有しているからである。

いわゆる「地縁意識」とは地縁の感情である。本稿が「感情」ではなく「意識」を採用するのは、主として「意識」という語は、感情を心理的な一つの結び目、すなわち引き離して抜け出すことができないものとしてイメージ的に描写するからである。そして、中国人の地縁感情はまさにこのような状態であるのだ。

中国人の地縁意識は主として四種類の「郷意識」から構成されている。すなわち「郷土意識」「郷音意識」「郷俗意識」「郷親意識」の四つである。ここでいう「郷」は簡単に解説すると、現代中国語で「故郷」すなわち「出生して

生長した地域」であり、人々がひとたび離れるとよく思いつく地域のことでもある。「郷土」は故郷の土地であり、「郷音」は故郷の方言であり、「郷俗」は故郷の民俗であり、「郷親」は同郷人のことである。唐代の詩人李白の『静夜思』の一節「拳頭望明月、低頭思故郷」（頭を挙げて明月を望み、頭を低^たれて故郷を思ふ）は日本でもよく知られている。これにより、中国人にはきわめて強い故郷への意識があることを多くの日本人は知るのである。このようないわゆる「故郷への意識」は、実はこの四種類の「郷」を語頭にもつ「郷意識」を指しているのである。「意識」については、実際はとりわけ重要視する意識、思想あるいは観念である。

中国人の地縁意識の核心はまさに「郷土意識」であり、「郷土意識」の根源は土地崇拜にある。中国の伝統文化は農耕文明の類型に属し、農耕文明社会の富は主として土地に由来するため、おのずと土地への依存と信仰を形成するのである。中華民国成立以前、中国の伝統的な漢族の家庭においては一般的に住居の中央の壁に「天地君親師」の位牌あるいは掛け軸をまつっていた。これをもって人々の天地・君主・先祖と聖賢の教えに対する崇敬と服従を表したのである。「地」はそのうちの二番目に位置する。

「天」に対する崇拜は伝統的な中国文化においては根強いものである。中国語で、きわめて感情的になった時に言

う「我的天哪」はまさに天をあがめる伝統的なことばの反映である。「地」は伝統的な中国文化では天と組み合わせるものとみなされ、万物を育てる属性をそなえているため、「天皇地后」や「天父地母」という言い方が古くからある。中国歴代王朝の皇帝がみな「天子」を自称したのも、天地の子ということであり、おのずと天や地に対し敬意を払うことになる。よって、北京に今も残る天壇と地壇のように、歴代王朝の首都の中心には帝王が天地をまつる場所が設置されていたのである。

しかし、ここでいう崇拜の対象としての「天」と「地」は、自然神として存在する。古い農耕文明の中国伝統社会の自然神に対する理解は、いうまでもなく農耕の現実の中に現れている。「天」の気候が順調でありさえすれば、「地」は五穀豊穰になるのであり、これこそが確かな現実である。そして、古代の中国人は宮廷事務の管理をになう神を「龍」のイメージに擬人化したうえで、民族のトートムとして立ち上げた。中国の大地には至るところにもつばら龍神をまつる「龍王廟」が現れるようになった。「地」については、中国の民間には古くから「地不離土」（地は土を離れず）の認識があり、「土地」こそが農民の生存する土台であり、それは神が管理するものでもある。この神は「土地爺」であろうと「土地婆」であろうと、みな自然の「地」の神とは異なり、地方性をそなえていた。中国の

大地において漢族が居住する地域には一般的に「土地廟」が建てられた。一つ一つの「土地廟」がまつるのは土地神であり、容貌がどうであれ、土地の民衆の生活の安寧を守ることを担っていた。よって、土地神は実質的には「地方行政の神」であるという人も学界にはいる。

中国歴代王朝の皇帝はみな龍神をまつらなかつた。彼らは自身が「龍」の化身であると考えたからである。しかし皇帝は土地神については必ずまつたのである。ただ、皇帝が土地神をまつる場所は「土地廟」とは呼ばず、「社稷壇」と呼んだにすぎない。「社」は古代中国においてはまさに土地神の意味である。古代中国文化では、天下の土地はすべて皇帝のものだと考えられていた。⁴⁾よって、社稷壇がまつる土壌は、自然の土壌に存在する青・赤・黄・白・黒の五色を含むことから、「五色土」と呼ばれた。「稷」は穀物神である。五色土は穀物を育み、穀物は万民を育てる、よって「社稷」ということばにも領土・領地と国家の意味がある。⁵⁾中国のいかなる時代の皇帝の住居の左側にも「社稷壇」が建てられ、皇帝は毎年社稷壇で祭祀行事を取り仕切ったが、これは伝統的な制度であつた。こうするのは、一つは皇帝の「天子」としての国家領土に対する絶対的な権勢を樹立するため、もう一つはさらに重要で、国家を代表し、土地が民を育てる恩に対し感謝の気持ちを表明し、神に祈り国家の繁栄と安定を守るためであつた。⁶⁾

もちろん、皇帝が社稷神をまつるのは、国家の君主も土地を重視し熱愛することを表しており、この点においては一般庶民と全く同様であつた。しかし、いかなる人物であれ、土地に対する感情においては、やはり自分が出生し成長した郷土に対しても親近感をもつのである。郷土の最大化は国土であるが、この概念は国際的な場面においてのみ用いられる。中国人が付き合ひをする場面においては、郷土概念の最大領域は省の境界に限られる。自身と家族を育んだ郷土が近ければ近いほど親密度も高くなる。よって、もし異郷で同じ村あるいは同じ町で生活したことのある同郷人に出会えば、遠距離の同郷人よりも親密度は自然と高くなるのである。

郷土を熱愛するといえ、後漢の歴史家・班固が『漢書』に書いたことばに言及しないわけにはいかない。それは「安土重遷、黎民之性」（土に安んじ遷るを重るは、黎民の性なり）である。⁷⁾このことばは学界で中国人の郷土觀念を分析するときによく引用される。また、伝統的な中国人の郷土に対する依存と信仰を表現するうえで、もつとも本質をそなえた特徴的なことばであると考えられている。現代は班固の時代より二千年近くたつており、中国人の郷土觀念は、生活様式が大きく変化したとはいえ、考え方はやはり元のままである。

「安土」の基本的な意味は郷土に落ち着くということ

ある。中国人はよく「只想着自己那一畝三分地」（自分の一畝三分の土地のことだけ考えている）とか「心中只有三畝地、兩頭牛、老婆孩子熱炕頭」（心中に三畝の土地、牛二頭、妻子とオンドルしかない）ということばで自分勝手な人を非難したり風刺したりすることがある。しかし、このような一家を扶養することのできる小さな郷土を営むことに熱中することは、中国人にとっては理解することのできることで、とがめることでもないのである。「安土敦仁」（土に安んじ仁に敦し）という『周易』に由来する成語がある。このことばのおおよその意味は、郷土を熱愛し安穩に暮らし、実直に仁愛をもって人に接することである。これはまさに儒学文化の追求するところの調和のとれた社会である。

「安土」にはさらにもう一つ、郷土を穏やかに安定させ繁栄させるよう努力する意味もある。現実の生活上、郷里の安定を維持すること、情熱をもって故郷に投資することに直面することがよくある。これは「安土」の觀念の表出であり、重んじられることである。そのほか、「安土」には故郷に錦を飾る、故郷に帰る、故郷で安眠するという含意もある。これらの意味は異郷に身を置く人にとっては重要である。生きている間には故郷のために力を尽くし、晩年には故郷へ帰り錦を飾る。これこそ中国人にとっては人生において最も面子のあることであり、最も首尾のよい結

末である。

これ以外に、「安土」は中国人にとって郷土の安全を守り、外来の侵犯を受けつけない神聖な含意も有する。ひとり人間がもし命を惜しまず郷土を守るのであれば、中国人の心中における榮譽ある地位は非常に高いもので、その逆は恥ずべきことと考えられる。中国人は一般的にこのような人となりを大事にするので、郷土がひとたび危機に直面すれば現地の民衆は鬪志をかき立てられ、異郷に身を置く同郷人もそれに呼応するのである。

「重遷」の意味は、簡単に言えば移動を重く見て安易に引越さないということである。過去と現在とを問わず、一般的な中国人はみな故郷の土地から離れたくないと願うものである。中国人が「背井離郷」（井に背き郷を離れる）ということばを使うとき、ある種の悲しみを含んでいる。これは、中国人の心の奥底では、このような境地に至ることが人生において最大の悲哀であると考えられている。しかし、こういった心情であっても、実際の生活において人々は故郷を離れざるをえない状況になることが多い。これには古今東西、例外はない。中国には「人は場所を変えると活きるが、木は場所を変えると死ぬ」ということわざがあり、現代の若者もよく「外の世界はすばらしい」という。これらは人々が故郷という小さな世界から抜け出し、新たな生活を創造することでもある。よって現代

の中国社会ではどこへ行っても他郷出身者を見かけるが、これは珍しいことでもないのである。

中国人は、ひとたび故郷を離れると郷土意識を生じやすくなるものである。この意識は中国特産の白酒と同様に、時間が長くなればなるほど味が濃くなる。中国歴代の文学作品の中で「郷を懐かしむ」ことをテーマとした作品はよく人々の心を動かしてきた。そのような作品は、中国人読者の心の内に潜む郷土を思う琴線を揺らし、さらに大きな共鳴を呼び起こすからである。たとえば、すでに他界した台湾の詩人余光中が書いた有名な「郷愁」という詩と、台湾の国民党元老の于右任が臨終の前に書き残した「望大陸」のように、二つの詩のことは非常に簡素であるが、その痛切な故郷を思う感情は、紙上に躍如としている。ゆえに、これらの詩を読んだ中国人読者で感涙を流さない者はほとんどいないのである。

中国には「十里不同音、百里不同俗」（十里の音は異なり、百里の俗は異なる）ということわざがある。この意味を簡単に解説すると、距離が遠く離れていなくとも言語や風習に違いがあるということである。このような状況は古代中国であれば理解できるのであるが、現代の中国ではどうであろうか。何千年の歴史を通じて、生産力は相当に発達しているが、こういった地域の違いは変わらず、以前の状況をとどめたままである。言うまでもなく、ずっと普遍

的に存在する「郷音意識」と「郷俗意識」は切り離すことのできないものである。

「郷音」は故郷の方言を指す。たとえば多くの日本人は唐代の詩人賀知章の「回郷偶書」にある「少小離家老大回、郷音無改鬢毛衰」（少小家を離れて老大にして回る、郷音改まる無く鬢毛衰う）という一節をよく知っている。この「郷音」はまさに故郷の方言という意味である。中国人はみな自身の故郷の方言を非常に好んでおり、故郷に身を置く時はあまり深く感じないが、ひとたび故郷を離れ、故郷の方言を記憶に収めると、はじめて故郷の方言に対する未練をかみしめるのである。

「郷俗」はまさに故郷の民俗習慣であり、「郷音」と同じく中国人が古くより偏愛してきたことである。これも中国の民俗習慣が今日まで多種多様である理由であって、重要な社会心理の土台でもある。中国の地域は広大で、地域間の距離が遠くなればなるほど民俗習慣の違いも大きくなる。よって、中国では異なる地域の人が集まると、各自の故郷の民俗習慣についての話に花が咲くのである。人々は付き合いうえで、みな故郷の民俗習慣の重要性を知っていて、外に出ると現地の民俗習慣を尊重することに注意を払う。同郷人に出くわすと、お互いの民俗習慣は同じなので、リラックスすることができ、自由気ままにできる。これも同郷人が集まった時に、なぜとりわけ親

しみを感じるかということの主要な原因であろう。

いわゆる「郷親意識」は、同郷の人との関係を重く見ることである。同郷関係にあれば、共通の「郷」があるため、血縁関係以外に最も親しみを感じる関係となる。「親不親、故郷人」（故郷の人は親密だ）「老郷見老郷、両眼泪汪汪」（老郷が老郷に会えば両目は涙いっぱい）ということわざがあるが、これらが意味するのはこのような親しみを感じる鏡像である。近隣関係は必ずしも同郷関係ではないが、長期にわたり近所に住む人を中国人は「半分同郷人」とみなすのであり、「郷」と緊密につながるのである。「親戚であれば必ず世話しなければならず、近所であれば必ず庇護しなければならぬ」は、隣近所の親しさが同郷人に劣らないことを表している。

二 中国の同郷関係コミュニケーション

中国語の「同郷」は故郷を離れた人へのみ適用できる。同じ故郷にいる人は「郷親」である。「老郷」ということばはその中間で、「同郷」の意味もあれば「郷親」の意味もある。異郷に身を置く中国の同郷人が集まると、とりわけ親密に感じる。もし日本と比べるならば、中国の同郷人の親密度は日本よりはずっと高いはずだ。これは顔を合わせる段階の熱烈な場面と食事をおごる時の支払いを争うに

ぎやかな情景からもわかるであろう。

中国の同郷人が会うと、最初に意識する行為は、まるで申し合わせたかのように現地で通用することばを避け、故郷の方言で話することである。これは、故郷の方言が幼い頃の記憶と情趣に満ちあふれていて、帰属意識を喚起し、親切な感情を十分に表現でき、お互いの心理的な距離を引き寄せ、完璧なコミュニケーションを実現できるからである。しかし、もし同時に他郷出身者がその場にいるならば、同郷人どうしの話は一般的に気兼ねするところがある。さらに多くは、故郷の方言を話すかたわら、他郷出身者に解説することで、他郷出身者に気まずさを感じさせないようにする。また、思い切って故郷の方言音をとまなかった標準でない共通語を話せば、他郷出身者にもわかってもらえる。中国に來た多くの外国人はみなこのような場面に遭遇したことがあるはずだ。異なる地域の方言の中国人が集まると、独特な雰囲気であるといえるであろう。

中国の同郷人が会って話す話題はきわめておもしろく、故郷の全てが重要なテーマになりうる。そのうち、「安土」はホットな話題で、故郷の「土地を熱愛する」恩を感じ、恩に報い、そして故郷に帰ることなどのテーマとなる。中国の同郷人は団結力が強く、集まるのはたやすく、「同郷会」のような民間組織をつくる。¹⁰これは中国の同郷関係の付き合いにおいてきわめて重要な特徴の一つであ

る。その原因は、前述の要因以外に、非常に現実的な目的がある。それは「交流信息、整合資源、相互互助、共同維権」(情報の交換、資源の組み直し、相互の助け合い、共同で権利を守る)という十六字である。新中国以前の古い時代においては、生産力は立ち後れ、交通や通信もきわめて不便であり、社会の不平等さは非常に深刻で、故郷を離れた同郷人たちが生計を立て生活レベルの向上を求めることはたいへん困難であった。よって、このような目的の同郷会組織が作られ、同郷人が参加することが広く普及した。新中国成立後は、人間関係については団結と友愛、人々の平等を主張し、大団結に不利な小団体主義に反対した。そして長い間、「同郷会」のような民間組織は消滅してしまった。前世紀末に、中国は経済改革に力を入れ、人口の流動性は激化し、社会は他郷出身者が団結互助の前向きな原動力を発揮することを必要としたため、「同郷会」のような民間組織はまた速いスピードで発展した。組織の目的にいささか変化が発生したのみで、ふつうは「交友聯誼、互通信息、整合資源、建設家郷、相互関愛、共同發展」(交流と友好、情報の交換、資源の組み直し、故郷の建設、相互の思いやり、共同發展)という二十四字でまとめることができる。

現在の中国社会に存在する「同郷会」は数が多く、インターネット上で検索すれば感じ取ることができるだろう。

同郷会の活動は中国社会においてたびたび人の目を引く。その活動形式は社会に流行する同窓会と同じように、多くはホテルで会食をする。解決の必要な事項について、たとえば故郷の開発計画、故郷の開発のための寄付、会の幹部の選挙など、ふつうはみな会食のさかざきを交わす間に終わる。よって、ほとんどの同郷会の活動は、娯楽性が強い。

海外で暮らす中国の同郷人は、中国国内に比べ、寄り集まる力が強く、同郷会のような組織はもつと多い。中国人のいる国にはほぼすべてこのような組織がある。海外の中国人同郷会における同郷の境界は一般的にみな省レベルが限界である。省レベル以下の同郷会はきわめて少なく、主として華僑の比較的多い地域、たとえば温州、湛江、潮州、東莞などに集中している。カナダ大華人同郷会のように国を境界線とする同郷会もあるが、きわめて少ない。

中国国内の同郷会か海外の同郷会かにかかわらず、同郷会は、中国の同郷人にとっては郷愁の感情を放出しお互いに友好を深めることのできる拠点である。もし同郷人の間で不愉快なことが発生し、仕事や生活で困難に直面した場合、同郷会もその役割を発揮し、解決を助けることができる。これも中国の同郷関係コミュニケーションの特別な点であろう。

三 中国の近隣関係コミュニケーション

中国の伝統的な儒学文化は現代までずっと近隣関係を重視してきた。「里仁為美」(里は仁なるを美と為す)という『論語』を由来とする成語がある。この成語の元の意味は「近隣となるのに仁愛の徳が最もよい」である。儒学の経典『左伝』に「親仁善隣、国之宝也」(仁に親しみ隣に善くするは、国の宝なり)とあるが、これは仁愛の徳をもって近隣に接することをさらに「国宝」のレベルにまで上げているのである。戦国時代に、滕の文公は滕国の太子であった頃に孟子を尋ね、国を治める道について聞いた。孟子が文公と話した時、近隣関係について「死徒無出郷、郷田同井、出入相友、守望相助、疾病相扶持、則百姓親睦」(死徒郷を出づる無く、郷田井を同じくし、出入相友し、守望相助け、疾病相扶持せば、則ち百姓親睦す)と言った。¹³⁾この意味は、民衆に生死にかかわらず土地に落ち着き、近隣の人々は出入りを問わず相互に友愛し、天災あるいは人災に遭った際には相互に助け合い、病気が発生したらお互いに救護するということである。こうすれば親密で調和のとれた社会関係を形成できるのである。このような近隣関係についての儒学名家の名言は、後世の中国人への影響が大きく、今日に至っても近隣関係における最高の

道徳規範で、少しも変わってはいない。

ならば、生活するうえで、どうすれば伝統文化による近隣への仁愛親善な道徳的要求に応じることができるのであるのか。数千年の実践をとおして、中国人は多くの原則に帰結した。たとえば、お互いに尊重する、平等に接する、老人を敬い幼子を愛する、礼には礼で返す、家計を分ける、近所を助けるのを楽しみとする、自身を厳しく律する、近隣には寛大に接する、内と外を区別する、言葉遣いは丁寧にするなどである。これら以外に、禁止性の原則がある。たとえば、近隣と張り合わない、細かいことにこだわらない、疑心暗鬼にならない、そそっかしく事前に知らせずに各家を訪問しない、悪い行為をむやみにかばわない、大声で騒がない、ペットを放し飼いにして近所に迷惑をかけない、近隣の陰口をしない、原則なく仲裁役を買って出ない、近隣と喧嘩しない、清潔な環境にする、近隣を無視しないなどである。これらの相反する両面の近所づきあいの原則は、現代中国のメディアで容易に見ることができ。もし日本の近所づきあいと比較してみるならば、そう大差ないことに気がつくであろう。

しかし、中国の現在の近隣関係は、農村社会と都市社会では大きな違いがあり、この点については、日本の状況とは異なる。よって、ここから二つに分けて検討してみたい。

(一) 農村の近隣関係

中国古代の農村の近隣については、一般的に一つか二つの大家族が分裂してできたもので、同族同姓の住民が多い。多くは親族であり、みなお互いに家族と呼ぶのにふさわしく、名前や長幼の順序を知っており、血縁関係の礼儀規範に照らして付き合いをしている。このようなタイプの農村の近隣関係は、現代中国であつても普遍性があると言えるはずだ。

伝統的な中国の農村は知人社会である。生産活動の基礎は家庭を単位としており、交通が不便なことに加え、「安土重遷」の意識を強くもち、農民の活動範囲は市場と年中行事の場面以外は一般的に村の中に限られる。よつて、付き合いのうえで高い閉鎖性をも引き起こしている。しかし、このような状況は近隣関係の密接さに大きなはたらきをもたらししている。儒学が提唱する道徳規範にしたがい、近所の住民どうしはお互いに仁をもつて接し、たびたび家に訪問して客になる。たとえば冠婚葬祭や家を建てるといった手伝いの必要な家庭があれば、事前に知らせず積極的にその家庭を訪問して手伝いをする。年末年始には互いに行き来して共に祝い合う。このような調和の情景は中国のいかなる平和時代においても常に見られたものである。もちろん、近所の住民どうしが常に一緒にいるので、も

めごとも避けられない。こうなると、一般的に村内の家長あるいは族長が出て来て対応にあたる。村内の仲が良くなるように、どの村にも独自の家訓や郷約のような制度性の文書があり、祖廟かあるいは村の公民館にまつてある。村内の組織制度は厳格であり、最下層の家長が対応しきれないような事柄については、大家長あるいは族長・村長が各階層の家長を祠堂に集め、協同で解決にあたる。中国には、このような農村生活の光景を描写した文学作品が多くある。たとえば現代の著名な小説『白鹿原』が書き表す陝西白鹿村は典型的な例である。^①この小説を原作とした同名のドラマがあるので、中国の伝統的な郷土文化と近隣関係を理解したい方は見てみるとよいであろう。

新中国成立後、特に前世紀末の改革開放後、中国の農村には大きな変化が起こつた。農村の近隣関係ももちろん例外ではない。現在の中国のメディアでは多くの人が、中国の農村の近隣関係は以前のようなではなくなつた、過去にあったような人情味に欠けるようになった、お互いに冷たくなつた、相互扶助も利益目的となつた、もめごともきわめて多くなつたなどと言っている。しかし反対の意見を言う人もいて、そういう人々は、伝統的な美德は依然として残されており、変化したのは表象だけであると考えている。私は、中国の農村にはここ数十年間は確かに大きな変化があつたが、近隣関係もそのとおりであつたと考えてい

る。たとえば、居住空間の変化である。多くの人が過去の小さな平屋から塀に囲まれた小さなマンションへと引越した。生産の方法と内容も変わり、各家には各家の仕事があるようになった。収入が徐々に増え、隣近所で助け合つて解決するような難題も少なくなつてきた。通信も発達した。各家にはテレビやパソコンがあり、各個人で携帯電話を持ち、隣近所の人たちで集まつて交流する必要もなくなつた。交通も便利になり、外出も容易となつた。外でお金を稼ぐ機会も増え、自身の限界を小さな村の中に押し込めておく必要もなくなつた。これらはみな自ずと地方の隣近所の付き合いを減少させたが、言うまでもなく、何ら悪いことでもない。

現代の商業的潮流が引き起こした社会通念の変革は、中国の農村にも大きな影響をもたらした。たとえば有償サービスや契約主義、法治観念などである。過去の隣近住民どうしの助け合いは無償であり、家を建てるのに隣近所の人々が手伝いに行つても給料を支払ふ必要はなく、家主が食事を提供すればいいだけのことであつた。現在はそうではなく、ふつうは賃金を払わなければならない。このような変化は、表面的には人情味に欠け、歴史的には後退であるように見える。しかし真面目に考えてみると、実はまさに社会の進歩の現れである。過去の相互扶助はある種の人情であつたが、このような人情は弁償の必要なものであ

る。そうでなければ、借りをつくるのであり、借りが多くなれば容易に尊厳を失い、自然と心理的なプレッシャーを形成し、近隣どうしもめごとを起こしやすくなる。しかし有償サービスはこの難題を解決した。過去には農村の近隣どうしがいくらかもめても裁判に出ることはきわめて少なかった。近隣どうしでお互いの面子を気にし、相手の面皮を引き裂くことを望まなかつたからである。しかし、今はそうではなく、みな教養水準は高くなり、理性の自覚を意識し始めた。よつて、もし村の書記や村長でも解決できない衝突が起つたら、現地の警察の助けを借りるか、法的プロセスでもつて対処することもおかしくはなくなつた。このような対応方法ははつきりと見えるため、見たところ衝突事案が多くなり後退したように見えるのである。実はその多くはある種の誤解である。

そのほか、現在の商業的潮流が農村にもたらしたもう一つの大きな変化として、「安土重遷」の意識が強い攻撃を受けていることである。農村の青壮年労働力は、高収入のため次から次へと故郷を離れ、外に職業を求めることにより、近所に常にいる青壮年が少なくなり、お互いの知り合の程度が低くなつた。逆に、老人と子どもは徐々に増え、よく顔を合わせるため知り合いの程度は高くなつてきている。このような状況は費孝通氏の言うところの熟人社会的農村に比べ、すでに大きな違いを生じており、赤の他

人社会への道を歩んでいるようである。もしそうであれば、明らかにある種の歴史的な進歩でもある。

ならば、今まで述べた農村の近隣関係の多くの変化は、中国の伝統的な近隣の道徳規範が農村ではすでに変わってしまったことを意味するのであろうか。その答えはもちろん「否」である。これらの変化により、中国の「親仁善隣」の儒学の道徳の伝統から外れてしまったとは少しも考えられず、逆にある種の現代化した伝承と発展であると言える。たとえば近所の人々の間における有償サービスについていえば、有償というのは一種の形式であって、仁愛の心から出る「サービス」こそが本質である。多くの農村において、近所の人々の間では依然として家族の呼称を残しており、家の青壮年の労働力が少なくなっても、老人と子どもへの思いやりが増え、外で働く人が帰省する時には近所の人へお土産を贈り、日頃の家人への世話に感謝の意を表明する。特に深刻な天災や人災が発生した時には近所住民たちで誰彼を問わず相互に助け合い、外で働く人も急いで故郷へ帰り対応にあたるのである。結婚式や葬式をする時や赤子が満一カ月となった時、老人の誕生祝いをする時、村の習俗や年越しの時など、近所の人たちはみな主体的に参加し、人情を解さず、根本を忘れ、面子を失ったなどと思わせないようにとひどく心配するのである。これらの明らかかな伝統的意義をそなえた鏡像は、中国の現代の農

村では今なお当たり前となっており、中国の農村を題材とした文学作品を読んだことのある人や中国の農村へ行ったことのある日本の人にも身にしみて感じるところがあるだろう。

(二) 都市の近隣関係

伝統的な中国の都市の近隣関係と農村の近隣関係については、付き合いの道徳規範から見ると同じであるが、その特徴には一定の隔たりが存在する。まず、農村の近隣関係の多くは親族関係であり、少なくとも歴史の長い知人関係である。一方で都市の近隣関係は親族関係という側面はあるものの、多くは赤の他人の関係から始まるものである。次に、農村の近隣は、住宅の土地権利の関係上、自由に変えることができず、「重遷」の意識の強さから、その多くに安定性がある。一方で都市の近隣には職場の関係上、移動できる要素が存在しており、住居の選択とよい隣家を選ぶのに自由自主の権利がある。よって近隣関係の不変性は保証できない。そのほか、農村の近隣の生産と生活および休息の時間は似かよっている。そのために共通の話題や顔を合わせて交流する機会も多く、付き合いの頻度も自然と多くなる。しかし都市の近隣とはいえ、仕事の性質と生活習慣にはそれぞれの特徴があり、顔を合せて交流する機会はずっと少なくなり、付き合いの頻度もずっと農村ほ

ど高くはないのである。

現代、特にここ三、四十年、中国の社会経済には大きな変化があった。その影響を受け、都市と農村の近隣関係も同様に変化したが、両者の隔たりが埋まることはなかった。これには主として五つの原因がある。

第一に、都市の人口の流動性が高くなったことである。過去の中国の都市人口は、社会全体が比較的保守的で、経済発展も比較的ゆるやかであったため、流動性には限度があった。現在はそうではなくなり、都市インフラの建設はさわめてはやく、都市の建物は絶えることなく造りかえられ、都市の区域も絶えず拡大されてきた。この過程で、人口の流動性は絶えず増してきているのである。このような流動性は農村と同じように故郷の周囲を取り巻いているのではなく、主として四つの場所に集中している。一つめは職場に近い場所であり、出勤に便利である。二つめは繁華街から近い場所であり、買物や娯楽に便利である。三つめは教育の場所（主として幼稚園と名門校）から近い場所であり、子育てにメリットがある。四つめは住宅の品質と環境が良い場所であり、住むのに快適である。これら四つの場所は需要が変化しているとはいえ、経済条件がますますよくなった都市住民にとっては、その魅力は言わずもがなである。よって、都市の近隣の安定性は農村に比べて隔たりがますます大きくなっている。

第二に、都市の核家族がますます多くなったことである。農村の多くも核家族であるが、両親は一般的に子女と同じ村にいて、家族親族間の付き合いは比較的便利である。しかし都市はそうではない。子女は結婚して手に職をつけた後、日本と同じように、多くは両親と一緒に住まなくなる。彼らの住所は一般的に自身の需要にもとぎ決めるもので、両親とその家族たちとの付き合いは相当に減ってきている。そして、便利さの面からいえば、容易に近隣と密接な関係を作り上げることができるのである。よって、いわゆる「遠親不如近隣」（遠くの親戚は近くの隣近所に及ばない）は、都市住民からすればさらに現実的な意味をもつのである。もし家中に何か事故が起こったら、同じ村に住む親族が手を貸し助けることができるが、都市住民からすれば、多くは「遠水不救近火」（遠くの水は近くの火事を救わない）と考えており、隣近所に助けを求めるほうがよっぽど現実的である。よって、都市の近隣住民には定住期間の長さにかかわらず、多くはお互い密接に関係したいという心理的需要があるものである。平穩無事な状態であっても、お互いに表面上は冷たく見えても、何か思わぬ出来事が起きた際には、ほとんどが手を貸して助け合うのである。伝統的な近隣の道徳はなおも存在しているので、みな相互扶助は一方的でないことを信じており、隣近所の人を助けることは、自分自身を助けることでもある。

第三に、都市住民の居住空間と環境の変化が大きいことである。過去には、都市の最小の行政単位は一般的に「街」「道」「巷子」「胡同」「里」であったが、これらの名称は今なお存在する。しかし、現実においては多くの場所に多くの高層マンションが建てられ、これら高層マンションは小さな街道や胡同を消滅させただけでなく、現代化を示す意味のある新名詞「社区」（あるいは「小区」）を誕生させた。都市のどの社区も独特な風情の建物群で構成されている。社区内などの建物にも通し番号がふられており、社区と外界の間は一般的に塀で仕切られていて、さながら過去の「大院」のようである。そのうえ、どの社区にも美しい名前がつけられており、命名構成は一般的に「園」「花園」「城」などである。一部の特殊な社区を除き、商業性不動産の特性をもつ社区は、一般的に不動産管理企業によって管理されており、同時に政府を後ろ盾にした「社区居民委員会」が設置されている。独立したビルのマンションも中国ではよく見られるが、これは社区と呼べるものではない。しかし、居住空間の構造と機能は社区と同じである。過去の都市住民の住宅は、その多くが隣近所とトイレ・キッチン・上下水道などを共用していた。近隣住民どうしで戸や窓が向かい合っており、出入りの際には顔を合わせることも多かった。一方、現在の高層マンションでは、各住居内部はすべて統

一されており、生活において必要なことは全て家の中で解決できるようになった。過去には家でご飯をつくる時に、近隣住民どうしでネギや醤油を貸し借りするのは当たり前で、温かみを感じさせることであった。現在では電話すれば、階下にある実店舗の店員あるいはネットの配達員が三十分以内に必要な食材（ご飯や料理も含む）を届けてくれるのである。このような居住条件と環境であれば、玄関から出る頻度は必然的に少なくなり、隣近所の付き合いも自ずと減少するのである。このような現象に対し、中国の都市の近隣関係は農村と比較すると非常に冷たくなったのだという人がいる。私はまったくそのとおりだとは思わない。都市の住民がドアを閉めて外へ出て近隣住民とめったに付き合わなくなったのは、ただ生活条件がよくなり、お互いに外へ出て付き合う必要性がなくなっただけだと考えている。

第四に、都市住民の考え方や意識が大きく変化したことである。この変化は良き伝統の改変ではなく、ある種の刷新と発展である。たとえば個人の時間と空間の意識について、過去の人々はあまり気にしていなかったが、現在では多くの人が、他人の時間と空間に対する要求と権利を尊重することはきわめて重要であると意識するようになった。これも、儒学が提唱する仁愛道徳の内容のほずである。よって、都市の近隣住民どうしで事前に知らせず訪問する

習慣は、ほぼなくなつた。たとえ用事があつて顔を合わせたくとも、電話で時間と場所を指定するのである。この点については日本の状況と近い。また、過去の人々にはほとんどプライバシーの意識がなく、あつたとしても家の中の状況を含まなかつた。今はそうではなくなり、ますます多くの人がふだんの家も女子の素顔と同じで、当然プライバシーをそなえていると考えるようになった。よつて、現在の都市の近隣住民の間では、必要があるときは別として、気ままに家の中に人を入れることは一般的には望まないものである。そのほか、現在の中国の都市住民は過去とは異なり、衛生意識がますます強くなつた。家に入るのにスリッパに履き替え、手を洗い口をゆすぐのである。近隣住民にもこのように要求するのはきまりが悪いように思えるが、近隣の家を訪問する時にも相手に迷惑をかけないよう配慮するのであり、自然と近隣住民の間でできるだけ訪問しないという新たな習慣を形成したのである。それだけでなく、都市住民に重視された自由意識や安全意識なども、このような新たな習慣の形成に大きな影響があつたのである。

第五に、中国の都市住民の生活水準と習慣が大きく変化したことである。過去の都市の普通の家庭の収入には限度があり、外食できる店舗が少なかつたため、一般的な家庭は、一日三回の食事を全て家で作つていた。通学通勤する

者は、昼食時に家へ戻つて食べることはできず、一般的に弁当を持つて行つたので、その時の多くの学校や工場や役所には、そのような人たちのために弁当を温める設備と場所があつた。近隣住民の間でどこかの家が食事を作れなかつた場合、自分たちの食事を分け与えて急場をしのぐこともいとわなかつた。年末年始ともなれば、お互いに家へ招待し手製の得意料理をふるまい合つた。各家の料理を味わい、にぎやかに過ごすことも当然のことであつた。しかし現在はいくつてはなくなつてきている。収入は増え、都市の飲食業界も活発化し、退職後に家にいる老人を除き、一般的なサラリーマンは、平日に家でご飯を作ることがますます減つてきており、ファストフードや出前を頼むことができます。ますます多くなつてきている。このような状況では、隣近所の人たちが集まつてにぎやかに過ごしたいと思つても、家へ招待することはめつたになく、外食で済ませることがほとんどだ。こうすることのメリットは、みな苦勞することなく、口に合つた料理を食べることができるといふことである。そのほか、過去の都市の家庭は子どもを中心としてまわることとはほとんどなかつたが、現在はそうではなくなつてきている。子どもは家庭の中心となり、特に子どもの勉強は家庭の一大事となつた。このため、多くの保護者たちは自発的に犠牲を払い、子どもたちのために最良の学習環境を整えることに尽力するのである。よつて、都市の

子どものいる家庭、特に高校入試や大学入試を控えた子どもがいる家庭は、一般的に近隣住民の特別な配慮を受け、できるだけ子どもの勉強が邪魔されないよう配慮されるのである。もちろんもしお互いに歳の近い子どもがいるならば、両者とも頻繁に交流することはよく見られる。しかし、その交流の時間を制限することを自覚して注意するのである。また、たとえば過去の都市住民の服装にかかる消費について農村と比べると、いくらか高くなく、家の中でも外でも同じ装いであった。現在は家の中に入ったらパジャマに着替えるなど、一つは清潔のため、二つはリラックスのためである。もし隣近所の家を訪問したいと思つたら、一般的にはこの要素に配慮する。さすがにパジャマを着て客を迎えることは誰もしたくはないのだからだ。このような例はほかにも多く、都市の近隣コミュニケーションの頻度が農村に比して大幅に減少したことの重要な原因であることが言えるだろう。

もちろん、中国の都市の近隣関係を農村のそれと比較すると、明らかな共通点もある。たとえば、近隣関係はすべて、中国の呼称は一般的に家族名称であり、これは同族支配体系の現実的な現れである。異なるのは、農村の近隣住民どうしが使用する家族呼称（たとえば「三叔」「四嬸」）は一般的には真実の親族関係であるが、都市の近隣における呼称（たとえば「王二爺」「李大姐」）は、ほとんどはた

だの敬称にすぎない。都市における近隣住民間のもめごとは、一般的には居民委員会が仲裁するが、それでも解決できなければ人民警察に助けを求めて法律に従つて処理することもできる。これは農村の状況ともほぼ同じである。

四 非地縁関係コミュニケーションの特殊原則

異郷出身者と現地住民の臨時的な関係は、ある種の非地縁関係だと考えてよい。外国人が中国で現地の人と付き合うのももちろんこの類いである。このような場合、中国文化の伝統は、一般的に異郷出身者に下準備を要求する。これを「入郷問禁」（郷に入りては禁を問え、「入郷問俗」ともいう。なぜなら「禁」も「俗」であり、学界では「禁忌習俗」と呼ばれている）¹⁵という。これも普遍的な特殊原則であり、中国人が外国へ行く場合、外国人が中国へ来る場合のどちらにも適用される。

中国の領域は広大で、地方の禁忌習俗はきわめて多い。よって、もし初めて現地人と接するのなら、中国人であろうと外国人であろうと注意しなければならない。中国の地方の禁忌習俗とされることには主として次のいくつかの側面がある。

(1) 言語禁忌。これは最も複雑な体系である。しかし外国人としては、現地における縁起の悪いことばや話題を事

前にはつきりさせておきさえすれば、大半の問題は解決可能である。たとえば多くの日本人は大多数の中国人が「死」ということを忌み嫌い、不浄・欠礼を意味することばであるを知っている。たとえば罵倒表現に使われる鶏(娼妓)・鴨(男娼)・二(粗忽あるいは愚鈍)といったことばや、目上の人の名前を呼び捨てにするなどである。

(2) 時間と空間の禁忌。たとえば年中行事の日時調整で、先にすること後にすることをひっくり返すことはできず、いつ何をするかも変えることはできない。都市住民の寝室に対するプライバシー性はますます重視されてきている。イスラム教を信仰する家庭では、聖地メッカは西方に位置するので、主人が礼拝する時には必ず西方に向かつてひざまずくため、このときに客人は西に座って東を向くことはできず、さもなければ大禁忌を犯してしまうのである。

(3) 物品の禁忌。たとえば宗教遺跡の見学といった場面で、宗教的な物品を不浄な体の部位で触れてはならず、手で触つていい物であっても先に手を洗う必要がある。客人となるときに薬品を携行してはならない。これは多くの地域で縁起の悪いことだと考えられているからである。イスラム教の区域に、豚肉あるいは豚肉を含んだ食品、および豚をイメージした物品を持つて入ることは、さらなる禁忌である。

(4) 飲食の禁忌。中国は飲食大国であり、食事をすることは天と同じく重要であり、食事中の礼儀作法への要求も自ずと高くなる。たとえば、現在の中国人が会食する際に、一般的には先に「忌避する食物はないか」と尋ねる。これは、中国人の地方の習慣と個人の信仰はきわめて複雑であり、先に聞いておかないと面倒なことになる恐れがあるからである。多くの地域では食事中に音を立てることを忌み嫌う。音を出すことは教養のないことの現れであると考えられているからである。食卓においては特に年長者に対する礼儀について、始めから終わりまで注意しなければならぬ。たとえばどの料理も年長者が先に箸をつけないならばならないなどである。

(5) 服飾と装飾の禁忌。重要でフォーマルな付き合いの場所において、中国人の服飾と装飾は日本と大きな違いはない。しかし庶民の間の私的な場所においては、状況が大きく異なる。たとえば色彩の文化的意義には注意を払わなければならない、若者は流行を追うなどである。しかしもし中国の農村へ行けば、髪の毛を花のような色に染めたとしたら、おそらく現地の人に受け入れられたいであろう。

(6) 客人となる、あるいは客人をもてなす時の禁忌。たとえば中国の主人が客人にお茶やお酒をすすめるときに、多くの地域では注ぎ口を客人に向けてることを避ける。なぜなら、注ぎ口を意味する「壺嘴」と虎の口を意味する「虎

「嘴」は同音で、不吉な兆しの疑いがあるからである。多くの地域では、客人と家の外で話すことを忌みはばかる。

(7) 贈り物の禁忌。たとえば金銭を贈り物とすることは中国では許されているが、金額には注意が必要で、三と四は一般的に不吉であると考えられている。果物や菓子折などを贈り物とする際にも、果物の名称の同音を気にする。

たとえば梨と「離」は同音、「桔」と「吉」は同音などである。同音字の縁起が悪ければ自ずと使うことができない。花・工芸品・書画・骨董・文房具・書籍などを贈り物とするにも、中国人は一般的にその象徴の意味を重視するのである。

(8) 行為動作の禁忌。中国の非言語コミュニケーションは日本と多くの点で似かよっているが、異なる箇所も少なくないので、注意が必要である。たとえば中国のイスラム教を信仰する地区では、男性は自発的に女性と握手をしてはならない。跪礼と叩頭礼については、中国人は一般的に父母と祖先に対してのみ使うものである。夫婦、近隣住民、主人と客人間ではこのような行為に及ばない。もしこのような行為に及べば、かえって面倒なことを引き起こすはずだ。多くの日本人には感謝の気持ちを表す時に両手を合掌する習慣があるが、中国のイスラム教を信仰する地区ではこれは禁忌である。現地で同様の意味を表すジェスチャーは、右手をゆつくりと左の胸の前に置き、同時に上

半身をわずかに前傾させることである。

禁忌習俗には以上のほかにも、当然まだまだ多くある。外国人として、中国に来て中国人と付き合い、付き合いの目的を実現したいと思うのなら、事前に「入郷問禁」することがきわめて重要である。

結 語

以上述べたことをまとめれば、中国人の地縁関係コミュニケーションについて、本稿は次の四点について論じた。第一に、中国人には強い地縁意識がある。それは主として「郷土意識」「郷音意識」「郷親意識」である。第二に、同郷関係の付き合いの主要な特徴である。第三に、中国の近隣関係コミュニケーションにおける、農村と都市のそれぞれの特徴と変化である。第四に、非地縁関係の付き合いにおける特殊原則は「入境問禁」である。結論は当然、もし外国人として中国人と付き合いのならば、いかなる地域に行っても、現地の地縁関係のコミュニケーション文化を学び理解することに注意しなければならないということである。中国には「是親不是親、非親却是親」（親しきは親しからず、親しくは非ずは却って親しきなり）ということわざがある⁽¹⁷⁾。このような身内に勝る関係は、中国の特色ある同郷人と隣近所の関係を指している。しかし、このような

「親」しい関係になれるかどうかは、個人の素養と対応力にかかっている。本稿がこのような「親」しい情を体験したいと思っている日本人の皆さまにとって一助となることを願っている。

注

〈1〉愛知大学語学教育研究室『言語と文化』第三五号、第三六号、第三八号、第四〇号を参照。

〈2〉中国の伝統的な礼儀は、早くから君主となる者は毎年必ず天地を供養することを定めていた。『礼記』に「天子祭天地、祭四方、祭山川、祭五祀、歳遍」（天子は天地を祭り、四方を祭り、山川を祭り、五祀を祭り、歳に遍し）とある。『礼記』「曲礼下」何亜輝編著『四書五経』第五卷、光明日報出版社、二〇一八年、一〇七九頁。

〈3〉庶民の間の「天地君親師」の位牌の書き方の決まりに対する解説は「天不連二（人不頂天）、地不離土、君不開口、親不閉目、師不要撇、位不離人」（天は二を連ねず（人は天を頂かず）、地は土を離さず、君は口を開かず、親は目を閉じず、師は撇を要せず、位は人を離さず）であつた。

〈4〉『詩経』「小雅」「溥天之下、莫非王土」（溥天の下、王土に非ざるは莫し）を参照。何亜輝編著『四書五経』第一卷、光明日報出版社、二〇一八年、四〇頁。

〈5〉「社稷」ということばは早くから「領土・領地あるいは国家」の意味をもっていた。『礼記』「曲礼下」に「国君去其国、止之曰奈何去社稷也」（国君其国を去るとき、之を止むるに曰く、奈何ぞ社稷を去るやと）とある。（何亜輝編著『四書五経』第五卷、光明日報出版社、二〇一八年、一〇七五頁。

〈6〉『礼記』「礼運」に「故先王患礼之不達於下也、故祭帝於郊、所以定天位也、祀社於国、所以列地利也」（故に先王、礼の下に達せざるを患う、故に帝を郊に祭るは、天位を定むる所以なり。社を国に祀るは、地利を列する所以なり）とある。何亜輝編著『四書五経』第五卷、光明日報出版社、二〇一八年、一〇九一頁。

〈7〉班固『漢書』「元帝紀」に「安土重遷、黎民之性、骨肉相附、人情所願也」（土に安んじ遷るを重むるは黎民の性なり、骨肉相附しむは人情の願う所なり）とある。漢語大詞典出版社『二十四史全訳・漢書・第一冊』二〇〇四年、一一八頁。

〈8〉余光中『郷愁』 小时候／郷愁是一枚小小的郵票／我在這頭／母親在那頭／長大後／郷愁是一張窄窄的船票／我在這頭／新娘在那頭／後來啊／郷愁是一方矮矮的墳墓／我在外頭／母親在裡頭／而現在／郷愁是一灣淺淺的海峽／我在這頭／大陸在那頭（幼い頃／郷愁は一枚の小さな切手だった／私はこちら／母はあちら／成人後／郷愁は一枚の細長い乗船券になった／私はこちら／新婦はあちら／その後／郷愁は一基の小さなお墓になった／私は外／母は中／

現在は／郷愁は一つの浅い海峡だ／私はこちら／大陸はあちら。

〈9〉 于右任『望大陸』 葬我於高山之上兮／望我大陸／大陸不可見兮／只有痛哭／葬我於高山之上兮／望我故郷／故郷不可見兮／永不能忘／天蒼蒼／野茫茫／山之上／国有殤（私を高山の上に葬りたまえ／我が大陸を望まん／大陸見えざれば／号泣のみ有り／私を高山の上に葬りたまえ／我が故郷を望まん／故郷見えざれども／永遠に忘れられず／天は蒼々として／野は茫茫たり／山の上／国に殉死者あり）。

〈10〉 中国同郷会の組織名称は統一されていない。よくある「同郷会」のほか、「老郷会」「会館」「聯誼会」「聯絡会」「協会」などがある。いかなる名称であれ、前に地域名称を付けさえすればよい。

〈11〉 『論語』「里仁」を参照。何亜輝編著『四書五経』第一卷、光明日報出版社、二〇一八年、三六頁。

〈12〉 『春秋左氏伝』「隱公六年」に「親仁善鄰、国之宝也」とある。楊曉陽主編『春秋左伝』江蘇鳳凰美術出版社、二〇一七年、八頁。

〈13〉 『孟子』「滕文公上」を参照。何亜輝編著『四書五経』第二卷、光明日報出版社、二〇一八年、三八七頁。

〈14〉 『白鹿原』は著名な作家陳忠実（一九四二―二〇一六）の代表作で、全部で五〇万字あまり、六年の歳月をかけて書き上げられた。この小説は陝西閩中地区の白鹿原にある白鹿村を縮図とし、「白」姓と「鹿」姓の二代家族の

三代に及ぶ恩讐争いを通して、清末から一九七〇〜八〇年代に及ぶ半世紀を超える歴史的な変化を描写したものである。一九九七年、この小説は中国第四回茅盾文学賞を獲得した。後に本小説を原作とした同名の映画・ドラマ・舞台劇・舞踊劇・秦腔（陝西省の伝統劇）などが作られた。

〈15〉 万建中著『禁忌与中国文化』第一章「禁忌民俗の本質」人民出版社、二〇〇一年。

〈16〉 『漢書』「酈食其伝」を参照。「王者以民为天、而民以食为天」（王者民を以て天と為して、民食を以て天と為す）。「天」は中国においては至高の神であり、民衆は食事を天とみなしたことから、食事の重要性がわかるのである。漢語大詞典出版社『二十四史全訳・漢書・第二冊』二〇〇四年、九八四頁。

〈17〉 『増広賢文』吉林文史出版社、二〇〇二年、三五七頁を参照。

主要参考文献

王徳有・陳戦国主編『中国文化百科』吉林人民出版社、一九九一年

湯一介・張耀南・方銘主編『中国儒学文化大観』北京大学出版社、二〇〇一年

尚會鵬『中国人與日本人』北京大学出版社、二〇〇〇年
王寧主編『評析本白話十三経』北京广播学院出版社、一九九

三年

- 陳成國編著『禮記校注』岳麓書社、二〇〇四年
- 楊威『中國傳統日常生活世界的文化透視』人民出版社、二〇〇五年
- 喻懷澄編著『歷代名言佳句欣賞詞典』南開大學出版社、一九九七年
- 武岡子主編『大中華文化知識寶庫』湖北人民出版社、一九九五年
- 胡戟撰『中華文化通誌第五 典・禮儀志』上海人民出版社、一九九八年
- 易中天『閒話中國人』華齡出版社、一九九六年
- 曹德本『中國傳統文化學』遼寧大學出版社、二〇〇一年
- 秦弓『中國人的德行』華齡出版社、一九九七年
- 孫蓀主編『論中國人現象』河南人民出版社、一九九二年
- [美國] 埃德溫·賴肖爾 (Edwin O. Reischauer) · 馬里厄斯·詹森 (Marius B. Jansen) 『當今日本人——變化及其連貫性』上海譯文出版社、一九九八年
- 劉忠信主編『社交大全』吉林大學出版社、一九九六年
- 李元授·郭友鵬·楊智敏『交際學』武漢測繪科技大學出版社、一九九一年
- 黃釗等『中國道德文化』湖北人民出版社、二〇〇〇年
- 喬繼堂『中國人生禮俗大全』天津人民出版社、一九九〇年
- 楊志剛『中國禮儀制度研究』華東師範大學出版社、二〇〇一年
- 張岩松編著『現代交際禮儀』中國社會科學出版社、二〇〇六年
- 賈玉新著『跨文化交際學』上海外語教育出版社、一九九七年
- 王福祥·吳漢櫻編『文化與語言』外語教學與研究出版社、一九九四年
- 許嘉璐主編『二十四史全訳』漢語大詞典出版社、二〇〇四年